岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

4.
腹腔内出血を契機に発見された膵巨細胞癌の1例(第191回岐阜外科集談会)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 善宏, 横尾, 直樹, 北角, 泰人, 白子, 隆志, 田中, 千弘, 吉田, 隆浩, 浦, 克明, 濱洲, 晋也, 吉岡, 幹博, 長田, 博光, 細江, 敦典 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/12465

第191回　岐阜外科集談会

日　時：平成13年2月14日㈬午後5時30分より
場　所：岐阜大学医学部　図書館4階講義室

1．手掌多汗症に対してレゼクトスコープを用いた両側交感神経焼灼術を施工した1例

松波総合病院　呼吸器科
春日井敏夫，横山智輝

症例は28歳女性。主訴は両側手掌の多汗。中学生の頃より緊張時の手掌の多汗を自覚。汗で鉛筆が持てない，汗でハンドルが滑って握れない程度であった。12年11月に上半身を30度挙上した半座位で，両腕は術操作に支障を来さぬよう左右に開いた体位で手術を施行。左右とも片肺換気下に第4肋間中腋線上にレゼクトスコープを挿入するone puncture methodで行った。レントゲン透視を併用して第2,3肋骨を確認し，同肋骨上でループ電極を押し当て交感神経幹を焼灼した。術後は肺損傷のないことを確認して8Frのアトムチューブを胸腔内に留置した。術直後より手掌の多汗は停止し，術翌日に退院。以後症状の再発は認めていないが，両側の腰から下に軽度の代償性発汗を認める。

2．二相性のMRI像を呈した気管支嚢胞の1例

関中央病院　外科
金武和人，日野晃紹
同　内科
臼井利雄，岩堤俊明，斉藤雅也，田上　真，
林　秀樹

症例は57歳，女性。検診の胸部X線において縦隔の異常陰影を指摘された。MRIにおいて腫瘍はT1,T2において筋組織より高信号であるが,二相性を呈していた。VATSで腫瘍を摘出した。腫瘍は4.5×3.8×2.3cmで重さ30g。薄い皮膜を有する単房性嚢胞で，H.E.染色において，嚢胞壁は繊維性で一部に軟骨，気管支腺様の構造を呈し気管支嚢胞と診断された。腫瘍内容の腹側はゼリー状で無細胞性，背側はペースト状で変形した赤血球を塊状に認めた。二相性を呈した機序として，嚢胞の内腔にはまず腹側に認めたゼリー状成分のみが充満しており，嚢胞壁背側より嚢胞内出血が起こり背側にヘモジデリンが沈着したためと考えられた。術後経過は良好で，第14病日退院となった。

3．上中縦隔に発生した胸腺嚢胞の1手術例

岐阜大・医・第一外科，臨床検査医学
杉本琢哉，岩田　尚，丸井　努，山中秀樹，
広瀬　一
同・臨床検査医学
下川邦泰

【症例】50歳　男性。
【現病歴】検診にて胸部X線上の異常陰影を指摘され近医を受診した。精査にて縦隔腫瘍を指摘され精査・加療目的に当科に入院となった。
【入院時検査所見】血液検査上は特記すべき異常を認めなかった。胸部CTにて上中縦隔に辺縁平滑，境界明瞭，内部構造均一な腫瘤陰影を認めた。胸部MRIでは嚢胞性病変が示唆され腫瘍背側は一部結節状に隆起していた。気管支鏡検査，食道透視では異常を認めなかった。
【経過】以上より気管支嚢胞，心膜嚢胞を疑い胸腔鏡下腫瘍摘出術を施行した。腫瘍の剥離は容易であった。摘出標本にて白色の嚢胞壁を認め固定標本では嚢胞壁は厚かった。病理組織像では気管支上皮や食道腺を認めず立方状の細胞から成る部位を認めたため胸腺嚢胞と診断した。
【結語】今回我々は稀な上中縦隔に発生した胸腺嚢胞の1例を経験した。発生部位より異所性胸腺組織から発生したものと考えられた。

4．腹腔内出血を契機に発見された膵巨細胞癌の1例

高山日赤　外科
田中善宏，横尾直樹，北角泰人，白子隆志，
田中千弘，吉田隆浩，浦　克明，濱洲晋也，
吉岡幹博，長田博光，細江敦典，市川伸也，
同　病理
岡本清尚

腹腔内出血を契機に発見された膵巨細胞癌の一例を経験した。84歳女性。主訴：上腹部痛。平成12年12月1日より上腹部痛が出現し,4日になり腹部全体に疼痛が広がり入院。

Blumberg signを認めたが，筋性防御はなかった。貧血を認めた。CEA, CA19－9は正常範囲内。

USで中等量の腹水の貯留と，膵尾部に径約4.5cmのhypoechoic massを認め，CTで辺縁は不均一に濃染。脾動脈は圧排され，膵静脈から門脈本幹に腫瘍塞栓と考えられる欠損像を認めた。試験的腹腔穿刺で，血液貯留であることが確認され緊急開腹術を施行。大網内の怒張した静脈からの出血であることを確認，結紮止血。膵尾部には乳白色の腫瘤を認めbiopsy施行。多核巨細胞と大型の単核細胞がびまん性に増殖。術後30日で肺肝移転を認め根治術の施行は断念。発症時すでに約6割に肝,肺,骨などに遠隔移転を伴い,膵管癌の中でも特に予後が不良。

2003年3月5日受理